

NHKとソーシャルメディア

ソーシャルメディアとテレビの連携。それをいち早く手がけ、成功モデルを築いてきたのはNHKである、ともいえる。公共放送であるNHKは、その業務の範囲が放送法という法律で規定されている。そうした中でも、ソーシャルメディアとの関わりを数年前から積極的に進め、「クローズアップ現代」をはじめとする報道番組ではツイッターの活用が奏功している。そこには、どのような背景や意思や意図があるのか。5年前からのソーシャルメディア活用に取り組み、また日本テレビとの共同プロジェクト「テレビ60」を手がけてきた倉又俊夫さんに、お話をうかがってみました。



今月の**G**な人

**NHK 報道局報道番組センター
ソフト開発プロジェクト
チーフ・プロデューサー**

倉又 俊夫さん

くらまた・としお/1966年生まれ。1989年NHK入局。報道局、衛星放送局、編成局デジタルサービス部などを経て現職。90年代中盤から「SimTV」などの実験的な番組で、テレビの未来のあり方を模索。NHKスペシャル「デジタルネイティブ」や「特ダネ投稿DO画」のネット投稿等を手掛ける。ソーシャルメディアの活用も積極的に行い、現在、「クローズアップ現代」のツイッターやフェイスブック等も担当している。

西田 2011年3月の震災のとき、広島の中学生がNHKのニュース画面をユーストリームに流して話題になりましたね。あのときの、NHKの対応について話を教えてください。

倉又 いや、私たちも試行錯誤の時間をかけて、ようやくいくつかのことがわかつってきたというレベルです。ただ、私にとって、ツイッターに積極的に取り組む転機となった出来事がありました。先ほど申し上げました、初めてツイッターを活用した番組『SAVE THE FUTURE』は2日連続でオンラインでしたのですが、その2日目の放送中に、あの「秋葉原殺傷事件」が起きたんです。ツイッターのアカウントを立ち上げたばかりでしたから、当初、私たちは番組の進行に合わせて次のコナーをお知らせするようなツイートをしていました。今から思えば、きわめて常識的、あたり障りのないメッセージを送っていたわけです。すると、ある視聴者から「ボットかよ」というツイートがあつたんです。「ボット」というのは、自動的にシステムによって発せられる機械的なメッセージというこ

とですが、「そう見ている人のだ」ということにはハッとさせられ、それで、どんな人がこんなツイートをしたのか追跡したところ、なんと13才の少年だったんです。それを知ったとき、これはどうでもいいメディアだーと直感しました。言つてみれば、これが私にとっての一つの転機です。「秋葉原殺傷事件」が起きた後、番組は放送予定と大きく変わり、ニュース等の情報を入れることになり、そこで、臨機応変に「このあと30分からはニュースでなく、など現場でわかるることを、その都度ツイートしていくのを覚えていました。

西田 解かります。私も3年前に「ダウンタウンDX」のツイッターを立ち上げまして、いろいろ試行錯誤していく中で、倉又さんがおっしゃっているようなツイッターの価値がようやく解かつてきました。それを早々に把握されていた倉又さんは、正直、すごいと思います。

倉又 ええ、私たちも試行錯誤の時間をかけて、ようやくいくつかのことがわかつてきたというレベルです。ただ、私にとって、ツイッターに積極的に取り組む転機となった出来事がありました。先ほど申し上げました、初めてツイッターを活用した番組『SAVE THE FUTURE』は2日連続でオンラインでしたのですが、その2日目の放送中に、あの「秋葉原殺傷事件」が起きたんです。ツイッターのアカウントを立ち上げたばかりでしたから、当初、私たちは番組の進行に合わせて次のコナーをお知らせするようなツイートをしていました。今から思えば、きわめて常識的、あたり障りのないメッセージを送っていたわけです。すると、ある視聴者から「ボットかよ」というツイートがあつたんです。「ボット」というのは、自動的にシステム

によって発せられる機械的なメッセージということです。でも、それが私にとっての一つの転機です。それが私にとっての一つの転機です。「秋葉原殺傷事件」が起きた後、番組は放送予定と大きく変わり、ニュース等の情報を入れることになり、そこで、臨機応変に「このあと30分からはニュースでなく、など現場でわかるることを、その都度ツイートしていくのを覚えていました。

西田 おっしゃるとおりですね。私たち放送局で、実は、コミュニケーションが苦手なんです。半世紀以上もずっと「送り手」しかやったことがない「送られてきたものに返す」というコミュニケーションにまったく慣れていません。ソーシャルメディアの登場によって、それをやらなくてはいけない時代になった。ソーシャルメディアに対して、どうしても「構えた気持ちになってしまふのは、そういうことにも原因があるのでしよう。

倉又 おっしゃるとおりですね。私たち放送局で、実は、コミュニケーションが苦手なんです。半世紀以上もずっと「送り手」しかやったことがない「送られてきたものに返す」というコミュニケーションにまったく慣れていません。ソーシャルメディアの登場によって、それをやらなくてはいけない時代になった。ソーシャルメディアに対して、どうしても「構えた気持ちになってしまふのは、そういうことにも原因があるのでしよう。

西田 「ボットかよ」とツイートした13歳の話、震災時の広島の中学生の話は、テレビというメディアの性質が大きく変化していることを象徴しているかもしれませんね。ソーシャルメディアが登場したことにより、今まで「受け手」一辺倒だった視聴者が、いつでも「送り手」になれる時代になった。私たちがこれから向き合っていく課題の本質ではないでしょうか。

西田 結局、「旬に触れた、生々しいツイート」が大きな反響を呼ぶツイートということですね。

倉又 そうですね。その「反響の大きさ」を測るとき、量と質をきちんとみていかないといけません。ツイート数が多ければ反響が大きいかというと、番組の種類によって変わります。たとえば「アニメのようなコントンツ」はツイート数が多くても同人物が複数回ツイートしていることが多い。一方、ディキュメンタリーやニュースのような番組は、ツイート数は少ないけれど、そこでツイートする人は多くのフォロワーを抱えているインフルエンサーったりします。ドラマであれば、ツイートの文字数、長いか短いかが見るべきポイントになります。

西田 私もまだ掴みきれていません。ツイートの反響についてはなかなか予測できないです。最近の興味深かった例で申しますと、ゲームクリエーターの飯野賢治さんが亡くなったときに、生前「クローズアップ現代」に出演いただいたことがあります。それが驚くのは、NHKがツイッターのアカウントを立ち上げたのが、今から5年前、2008年であるということ。当時まだツイッターの黎明期であり、ソーシャルメディアという言葉すら世の中に漫透していないなかで、私たち民放は、ほとんどがソーシャルメディアに対しては慎重に静観していました。そういった中、NHKがいち早くツイッターのアカウントを立ち上げたのは、かなりチャレンジングな試みだったのではないかでしょうか。

西田 あのときは、震災という緊急事態であり、放送でも問題ないと判断し許容したわけですが、ある意味放送の本質とは何かを突きつけられた出来事でもありました。広島の中学生は、「大変なことが起きた。テレビが見れない人もいるだろう」と、これは世界中の人に知ってもらわなくてはいけない……そんな純粋な思いからテレビ画面を力

めで撮影しユーストリームを使って世界に発信した。そうした彼の純粋な思いに触れるにつけて、今は、これがかなりの反響がありまして、「クローズアップ現代」ってそういうことも伝えていた番組だったんだ……と番組のことを初めて知つていただいだ方もかなりいらつしやいました。

西田 でも、そのとき飯野さんの回を番組ホームページで振り返ってみると、それをツイートしたんです。これがかなりの反響がありまして、「クローズアップ現代」ってそういうことも伝えていた番組のこと、初めて知つていただいだ方もかなりいらつしやいました。

西田 でも、そのとき飯野さんの回を番組ホームページで振り返ってみると、それをツイートしたんです。これがかなりの反響がありまして、「クローズアップ現代」ってそういうことも伝えていた番組のこと、初めて知つていただいだ方もかなりいらつしやいました。